

# 『FAKE HEAVEN』

## 登場人物

- 男 25歳 この時代では珍しい労働者
- 女 (人造人間) 外見は20代 男の彼女

## 概要

AIによる作り物の世界で作られた彼女とデートする話。  
全てが作り物の幸せは、天然自然の不幸よりは良いのだろうか。

男「お待たせ」

女「いいえ、今来たところです」

微笑みながらそう言う恋人に、男は苦笑する。  
本当に今来たわけがない。  
待ち合わせ予定時間より男は幾分遅刻している。  
その分だけ彼女が待っていたのは考えるまでもない。  
しかも、彼女はだいたいにおいて予定時間前に現地にいる事を心がけている。  
その待ち時間も加えれば、10分や20分はこの場にいた可能性が高い。

男「本当にごめん」

女「だから、大丈夫ですってー」

笑みを絶やさない恋人は、良いながら男の腕に自分の腕を絡ませる。

女「それより、行きましょう!」

男「そうだな」

それ以上の謝罪を止めるために、彼女は男を促す。  
男の方もそれ以上あれこれ言うよりも、今日これからの予定をこなす事にした。  
二人のデートを。

労働から人々が解放されて久しい。  
21世紀にAI（人工知能）が実現し、22世紀には労働の大半が機械に置き換えられた。  
全ての産業分野でそれがなされたわけではないが、人は働かなくても生活の糧を得られるようになっていた。  
その為、仕事はなかば趣味のようなものになっている。  
まだ人間がせねばならない部分も残ってるが、そうでない分野における労働は、個人の好みによって行われていた。  
日がな一日何もしないでいると、それはそれで調子がくるうという者はいる。  
そうした者達は、適度な仕事をこなしていた。

そうでない者達も、自分の趣味に没頭して日々を過ごしている。  
生活を支える産業分野などは、機械が既に代わっているので人がこなす必要がない。  
もっぱら人々がしているのは、生活に直接関与はしない趣味分野になっていた。  
趣味で小説を書く、漫画を描く、絵画を描く、音楽をつくる、衣服を作るなどなど。  
ゲーム製作や世界旅行まで誰もが好きな事を好きなように行えるようになっていた。

不思議なもので、いつでも会える、いつでも一緒というのはそれはそれで飽きる。  
強制的にでも距離を置いておく時間というのがあると、関係を楽しむ事が出来る。  
折角作った恋人であるので、出来れば一緒にいて楽しい時間というのを長く楽しみたかった。  
相手に飽きたら代えることも出来るが、それはそれで面倒や手間もかかる。  
一度交換したら、次がくるまで時間がかかってしまう。  
その時間もまた待つ楽しみになるのだが、出来ればそれはあまり作りたくなかった。  
代わりにやってくるのも、おそらくは似たようなものになるのだから。  
だったら、出来るだけ長く付き合っていくのも悪くはない。  
似たようなものを何度も取り替え、その都度待ち時間を作るよりは良い。  
短い付き合いを繰り返すより、末永く一緒に。  
お互いに相性の悪い部分も受け止めあっていきたい。  
やや古風な考え方と言われるようになったそんな関係を、男は求めていた。

そして、相手もそういう風に作られていた。

女「わあ……」

今日のデートは、遊覧飛行である。  
乗り込んだ飛行船が飛び立つ。  
ゆっくりとした速度で東京湾沿岸を進んでいく。  
多重階層構造になってる都市が見せる夜景は、光り輝く回廊のようになっている。  
見ているだけでも感動出来る。

女「すごいです!」

男「本当にな」

ただひたすら目の前の光景を、様々な照明が作る光の列に素直な感想が出てくる。  
高さ数百メートルの高層建築の連なりは、光の壁となって見る者を圧倒していた。

男「これで食事でも出来ればいいんだろうけど」

女「仕方ないですよ。  
一周30分なんですから」

美しい光景を見ながら食事でもすればより一層楽しめだろうに。  
そう思うって少し残念そうな男を、恋人が慰める。  
どれだけゆっくり回るといっても、そこは遊覧飛行である。  
それほど長い時間滞空してるわけではない。  
その限られた時間では、優雅な時間を満喫するのは少しばかり難しい。

男「今度はレストラン飛行にしてみようか」

遊覧飛行が提供するいくつかのコースの一つを検討するのも無理からぬ事である。  
これほどの景色を見ながらの食事なら、おそらく楽しいものになるだろうと思って。  
そして、もっとゆっくりと時間をかけて楽しみたかった。

女「また今度ですね」

男「うーん。  
……予約、とれるかな?」

女「点数も集めないといけませんし」

男「となると……………結構先になるな」  
取り出した情報端末に表示される自分の所持点数を見てため息を吐く。

男「しばらくはお預けになるな」

女「そうですね。  
でも、楽しみにしてます!」

微笑む彼女に「そうだな」と頷いた。  
待つのはちょっとだけ大変だが、そう言われてしまうと反論も出来ない。  
楽しみにしてるのは彼女も同じなのだ。

何もしなくても生活に必要なあらゆるものが用意される世界。  
それでも全てが即座に手に入るわけではない。  
定期的に加算される点数と呼ばれる数値が、得られる物資や娯楽の上限を決めている。  
かつて存在していた金銭と同じものだ。  
こうしておかないと、生産や供給出来る限界を超えた要望が出されてしまうのだ。

それを抑える為に、提供出来る様々な物資や娯楽、サービスなどを点数という数値で縛っている。求める何かを得るには点数が必要で、物資や娯楽などに付けられてる点数を用意出来なければ求めるものは得られない。働かなくても自動的に手に入るものであるが、これが人の活動に適度な抑制をもたらしていた。

男「予約、入れておくか？」

女「いいんですか？」

男「まあ、これだけ時間があれば、無理なく点数を溜められるよ」

女「うーん」  
その言葉に彼女は考え込む。

確かに半年もあれば点数は溜められるが、それだと生活などがギリギリになりかねない。楽しみをあまり先延ばしにしたいわけではないが、これから半年ほど無理を重ねるのも考えものだ。

女「もう少し先にしません？」

男「いいのか？」

女「はい！」  
その間に、ちょっとしたデートに連れていってもらえれば」

男「そっか」  
男はそれを承諾した。  
急げば半年でどうにかなるにしても、その間我慢を重ねるのもつらい。  
ならば、ほどほどに遊びながら、余裕を持って予約を楽しむのも良いかもしれない。

男「じゃあ、そうだな……………。  
一年くらい先でいいかな？」

女「はい、それで」

男「じゃあ————予約したよ」  
これで一年後に空の上で優雅な時間を楽しむ事が出来る。  
あとはその時まで点数を溜めていけばよい。  
彼女と共に過ごしながら。

遊覧飛行が終わって、飛行船から客が降りていく。  
その中の一組として、男と恋人はスカイデッキに足をつけていく。  
あたりはすっかり暗くなってるが、適度に間隔をあけてる街灯が足下を照らしてくれる。  
その光の中に浮かぶ様々な人。  
一人で、あるいは友人と。  
恋人、あるいは夫婦。  
家族づれもいる。  
他に、親戚だろうか、老人から子供まで大人数の一行もいる。  
様々な者達がこの遊覧を楽しんでいたようだ。  
そのどれもが一様に満足した顔をしている。  
そして、  
恋人・家族といった者達は、誰もが似たような構成をしていた。

大半が、男女のどちらかが……………整ってるとは言い難い容姿をしていた。  
顔立ちの特徴をはっきりと言うと失礼どころか無礼、侮蔑になるような造作である。  
対して、その相手となってる者達は一樣に美しい、整った見た目をしていた。  
超絶的な美形もいるし、そうでなくてもどこか愛嬌があるような、決して不快感を抱かせない姿をしている。  
そういった者達はまず間違いなく全てがある技術によるものであった。

人造人間。  
作られた存在。  
それが、見目麗しい者達の共通事項である。

AIによる管理が実行される中で、様々な事が不安としてあげられていった。  
機械は人間の生き方を悪い方向に進めないか、というのがその中で最大のものだった。  
機械の反乱、機械による独裁体制。  
あるいは、牧場のように人間を管理する状態。  
それらが実現してしまうのではないかという恐れがあった。

そうならないよう、AI自身も参加して、様々な規定などが設けられていった。  
いまだに未解決の問題もあるが、それでも様々な試行錯誤や妥協などを繰り返して、  
とりあえずの最適解が出されたものもある。

その一つが、恋愛であった。

どうしてもあぶれてしまう者は出て来る。  
それを救済する事は難しい。  
そこには人間の意志が介在していくからだ。  
本人同士の合意がなければ、交際など望むべくも無い。  
なので、どうしても万人の願いを叶える事が出来なくなる。  
だが、人の欲求を可能な限り叶える事を求められてるAIは、そこに一つの可能性を示した。

人間同士では不可能ならば、人間ではない存在を相手として用意する—————

これを実現するために、人工的に作られた人間が用意されていった。  
人造人間である。

とはいえ、これは機械というわけではない。  
提供された様々な人間の精子や卵子によって作られた存在である。  
クローン（複製人間）に近いものがある。  
様々な遺伝子を配合し、各自の好みに合うような、可能な限り近い存在を作り出す。  
そうやって、配偶者を求める者達に適切な相手を提供するようになった。

当初は人道や倫理的な観点からの反対がわき起こった。  
しかし、数多くの独身者達からの声がそれを覆した。

「相手がいるならいい。  
だが、俺達はずっと一人でいろっっていうのか」

それはそれで不幸を放置するようなものでもある。  
当時様々な決定に参加していたAIも、このような者達に救済を与えたいと願っていた。  
その声が反対を大きく押し切った。

その結果、世の多くの者達は理想的な、少なくともそれに近い相手と出会えるようになった。自分の好みや理想にあわせて合成される人造人間によって。注文してから遺伝子の配合が始まり、急速に成長させられる彼等は、発注者の理想となるような様々な情報が入力されて誕生する。発注者の好みにあうような性格や考えを持ち。発注者の事を理想的な存在と見るように思考が調整され。全てが発注者の望むように作られてこの世にやってくる。

男の隣に立つ恋人も、そうした作られた存在だった。男が求めるような見た目をして、男が望むような性格をしている。注文をしてから納品されるまで3年。それまでただひたすら点数を溜める日々。

もともと男の望むような存在として誕生してるだけに、変な気兼ねも気配りも必要なかった。友人はともかく、まともに恋人がいなかった男であってもつきあえるような相手だった。無駄な苦労もなく、しなくて良い喧嘩もせずに今までやってきている。

気に入らなければ、どうしてもそりが合わなければ、廃棄する事も可能だ。所詮は作られた存在なので、厳密には人間とは、生命体とは認知されてない。なので、廃棄処分をする事も出来る。だが、男はそんな事をするつもりはなかった。多少合わない部分のあるにはあるが、それは小さな事で許容範囲内である。さすがに全てを望み通りにというわけにはいかない。いくら何でもそこまで都合良く合成出来たりはしない。だが、それでも求める全ての要求水準は満たしてくれている。

それに、一緒に過ごした時間がある。積み重ねてきた過去がある。作られた彼女が恋人として自分の所にやってきてから、数年の月日が流れている。延命技術の進歩で寿命がのび、青年期も大幅にのびてはいる。その分、無駄に出来る時間も増えたが、一緒にいた時間の価値が下がるわけでもない。その時間をそう簡単に捨てる事が出来るほど、男は薄情にはなれなかった。出来ればこのまま一緒に時間を重ねていきたいと思えるくらいの人間性は持ち合わせていた。

無駄な恋愛の駆け引きというものもない。不要な喧嘩などもしない。出会ったその時から、円熟した夫婦のような関係をもつ事が出来ているのだ。長い時間をかけて構築しなくてはならないそれを、最初から手に入れている。男はそれで満足だった。これ以上を望むつもりもなかった。そもそも、これより良い状態を想像が出来なかった。

女「明日はどうします?」

男「仕事だから、また出かけなくちゃ」

女「そうですか。  
それじゃ、家で待ってますね」

男「ああ、頼む。  
必要な点数はそっちの端末に入れておくから」

女「大丈夫ですよ。  
たっぷり残ってますから。  
むしろ余ってるくらいです」

男「そうか？  
ならいいんだけど」  
そんなやりとりをしながら家へと向かっていく。

高層居住区画の一室まで腕を組みながら。  
そうしながら男は考えていた。

(一年後か)

来年の今頃、空中レストランでのデート。  
その時に切り出してみようかと思ってる事がある。

(断りはしないだろうけど、それでもなあ……)

付き合いの長くなった彼女との関係を更に一歩進めるため。  
その為に必要な事を来年実行しようかと思っていた。

(その為にも、指輪だよな)

色々変わった事もあるが、変わらずに続いている事もある。  
恋人から配偶者になるには、それ相応の行為が必要であるのはこの時代でも変わらない。  
その為にも、この一年まだまだ頑張らないといけなかった。

(まあ、言わなくても気づいてるだろうけど)

そういう風に作ってもいるので、おそらく男の考えなど恋人は分かってるだろう。  
それでも、実際に事を起こすまでは知らぬ存ぜぬを通してくれるはずだ。  
また、そうであってもしっかりと伝えねばならない事もある。

(楽しみにしてくれてるといいけど)

そんな思いに応えるように、恋人は組んでる腕に少し力を込めて、更に体を寄せてきた。  
それが偶然なのか、本当に気持ちを汲んでの事なのか。

(まあ、どっちもでいいか)

どっちでもあってもかまわない。  
どっちであってもそれで良い。  
今、ここでこうして一緒にいられる事が幸せだった。  
相手が作られたものであっても。  
大事な誰かである事に変わりはないのだから————

数年後、男は彼女を廃棄する  
理由はいくつもあるが、そのどれもが大したものではない。

——ただ、飽きたのだ

しかし、この時代では、さほど珍しいことではない  
彼女らは結局どこまでいっても人間ではなく、いくらでも替えが創られる『物』なのだ。

一つのゲームに飽きて新しいタイトルを求めるように  
恋愛も消費される商品となったのだ。